

『ダニエル・デロンダ』に見る解体と再建の試み

—ユダヤ人物語にみるジョージ・エリオットのヴィジョン—

福永 信哲

Our aim is to make clear how George Eliot is trying to hold up a mirror in *Daniel Deronda* against later nineteenth-century Britain in her social and spiritual context. Christian tradition, in her view, has long been settled more or less into a dead-letter conventionalism. She finds in Jewish way of life a comparative viewpoint from which she can look closely at her own cultural background. In order to restore a living religion into the whole fabric of society, Hebrew language and its organic vision of history seem to Eliot to give a valuable hint for British people to learn from. Her awareness of this finds expression in a thread of the Jewish story woven in parallel with the English one. We will examine this sense of purpose on the part of the novelist on the evidence of the text.

Keywords : ユダヤ文化, キリスト教, 聖書批評, 意味探求, 予型論, 実験科学

序

『ダニエル・デロンダ』(*Daniel Deronda*) (1875-76 以下 *DD* と略称) は、作品の時代背景としてジョージ・エリオット (George Eliot) の生きた時代 (1860年代と察せられる) を描いている。この意味で『ミドルマーチ』(*Middlemarch*) (1871-72 以下 *MM* と略称) が、作品執筆からほぼ40年前のイングランド地方都市を描いたこととは興味深い対照を示している。彼女は主要な小説としては初めて、自分の生きている時代の姿を作品の鏡に映し出し、これと向き合ったのである。この試みは、作家が現代という時代をどう捉え、自己をどう確認するかという模索の一環であったことが察せられる。

みずからの生きている時代を小説の素材にする試みは、エリオットとしては大きな挑戦であった。*MM* までの従来の小説とは違って、半世紀に近い時を遡って得られる歴史的回顧の利点を捨てなければならなかったからである。ヨーロッパ史の中で現代イギリスがどのような位置にあり、どこへ向かお

うとしているのか、これが *DD* の基本的テーマである。らせん状に織りあわされたイギリス文化とヘブライ文化の触れ合いと対話は、作家が自分の生きている祖国の現状を振り返り、ヨーロッパ文化の歴史的伝統の中に位置づける意味で貴重な視座を提供することとなった。本論は、デロンダとユダヤ人の関わりあいを描くテキストに、作家のこの問題意識を裏づける。

I. 19世紀後半イギリス文化を省みる鏡としてのユダヤ人の生きざま

DD の主人公たるデロンダは、貴族の伝統の中で育まれ、イギリス人としては最高の教養を身に付けていた。紳士として恵まれた境遇にありながら、彼の心中には自分の出生について何一つ事実を知らされないことに由来する不安と疑念がわだかまっていた。伯 (叔) 父を自称するサー・ヒューゴー・マリンジャー (Sir Hugo Malinger) は実は父親ではないのか、母親は一体どこの誰なのか、自分は何者な

岡山大学大学院教育学研究科 社会・言語教育学系 英語教育講座 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

An Attempt for Deconstruction and Reconstruction in *Daniel Deronda* — George Eliot's Vision of the Jewish Story—

Shintetsu FUKUNAGA

Department of English Language Education, Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1, Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

のか、これらの疑問を心にしまい込んで、自分が献身すべき道を模索していた。

そんなさ中に、ふとした偶然からユダヤ人娘ミラ（Mirah）の命を救ったことが契機になって、ユダヤ人の生きざまとその悲劇的な歴史に興味を覚えるようになった。ミラの離散した家族を探す努力が機縁になって、ユダヤ人質屋イズラ・コーエン（Ezra Cohen）の店に寄寓するモーディカイ（Mordicai）と知り合った。ユダヤ民族に流れる預言者の霊性を受け継いでいるかのような、このユダヤ人の人となりと情熱がデロンダの心を捕らえたのである。出会いの後ほどなく、モーディカイはデロンダの中にユダヤ人の血筋と宗教的感受性を直感した。こうして彼は、デロンダに自分のやり残したユダヤ民族精神復興の夢を託そうとしたのである。

モーディカイの直感は、後にデロンダの出生の真実について正鵠を射ていたことが明らかになった。デロンダの母親が彼の前に現れ、出生の秘密を明らかにしたのである。彼女は、父親（デロンダの祖父）の体現するユダヤ教の厳格な鑄型に背を向け、歌手としての芸境を謳歌していた。その母親が不治の病を自覚するに及んで、不可抗力に突き動かされるかのように、息子に出生の秘密とその後の経緯を語り聞かせた。このときまでには、モーディカイとの触れ合いを通して血の宿命を予感していたデロンダも、自分の出自を知るにおよんで、おのれの数奇な運命と向きあう決心を固めた。生まれ育った環境と血の宿命のはざまで、結局自らの属する民族的アイデンティティを探究する道を選び取ったのである。かくして、ユダヤ人国家再興の志に献身し、東方（エルサレム）に赴くことをもって作品は結末を迎える。

エリオットが*MM*で見せた生命の相互依存ネットワークの絶妙な描写を犠牲にしてまでユダヤ人要素の描写にこだわった理由はどこにあるのであろうか。ジェーン・オースティン（Jane Austen）のように、おのれを没して多様な人間の性格をさながらに見せる境地から離れ、思想小説の傾きをもつユダヤ人物語に踏み込んだ動機は何であったのだろうか。この謎は、エリオットが自国文化の現在のありようをどう見るかという問題と深くかかわっている。彼女は*DD*では、おのれの生きている時代を振り返る鏡として、興行の深いヨーロッパの歴史をかざしたのである。

とりわけ、ヨーロッパ史の中でユダヤ人の歩んできた歴史は、民族と宗教が渾然一体となった独自の文化を継承する一筋の道であった。民族の個性を保ちつつ、自分たちが現に生きている異文化社会との

接点で自己実現を図ろうとする歩みが彼らの歴史を形作ってきた。彼らは、民族国家を持たないがゆえに迫害され、あらゆる苦しみ嘗めてきた。この歴史的事実によって、彼らは自己の文化を相対化する知恵を身につけたのである。エリオットは、ヨーロッパ諸国家を流浪し、離散（Diaspora）の業苦を生き抜いたユダヤ人の生きざまの中に、異文化の中で生きる人間のしたたかさと柔軟さを見た。彼女は、作家生活に先立って文芸批評の道にいそしんでいた1850年代に、スピノザ（Spinoza）の『エチカ』（*Ethics*）（1677）をラテン語から英訳¹（1854-56）した。この英訳版には、正統派ユダヤ教の排他的な律法主義に抗して文化的・道徳的寛容の精神を説いたスピノザに対する心服の念が滲みだしている。またほぼ同じ頃、「ドイツのウィット・ハイネリッヒ・ハイネ」(German Wit : Heinrich Heine) (1856)と題するエッセーを執筆している。ここにも、祖国ドイツへの愛着とユダヤ民族精神の間で揺れ動いた漂泊の詩人ハイネに対する純粋な共感が感じられる。

スピノザとハイネへの共感が示唆するように、エリオットは作家として成熟するにつれて、ユダヤ人の生きかたを深く理解するようになった。異文化の衝突するヨーロッパの国際状況を柔軟に生き抜いた魂への共感が彼女を突き動かしたといえる。もう一つには、聖書を生み出した民族に対する畏敬の念が挙げられる。エリオットは、幼い頃より聖書に親しみ、これが彼女の精神を練磨する基盤となった。それゆえ、正統派ユダヤ教徒であれ、スピノザやハイネのような異端的な魂であれ、旧約聖書を生み出した民族の知恵の継承発展に寄与した精神に敬意を抱いていた。² この共感の伏流水が*DD*でユダヤ人物語として作品テキストの地表に湧き出したと察せられる。これがエリオットにとっては、19世紀後半のイギリス社会のありようとイギリス人の生きざまを省みる契機となったのである。

以下、作品のユダヤ人物語テキストに焦点を当てて、作家が同時代の祖国の死文化した精神文化と言葉を蘇生させようとした問題意識を跡づけてゆく。

II. 作家の意味探求の表現としてのデロンダ

先述のユダヤ人物語の筋書きが暗示するように、デロンダが背負った、育ちと血族の絆の矛盾をいかに和解させるかというテーマには、エリオット自身の精神遍歴が深く投影している。彼女は、アングリカン・チャーチの伝統に生まれ育ち、敬虔な宗教心情を持ちながら、時代精神の動きに鋭敏な知性の声に従って教会に背を向けた。その後、志を同じくするジョージ・ヘンリー・ルイス（Georg Henry

Lewes, 以後ルイスと略記)と、時代の道德規範が許さない「結婚」を貫いたエリオットは、祖国の文化的伝統に対する愛着と批判の相半ばする自己矛盾を宿命づけられていた。その結果、彼女は主流文化に対して半身に構える姿勢を保った。保守的心情と、汎ヨーロッパ的教養と異文化への寛容とを志向する知性との矛盾は、おのずからデロンダの内面描写に反映している。

デロンダがマイラとの数奇な出会いに触発されて、ユダヤ人の生きざまに人間的な興味を抱くようになったいきさつを描く一節がある。(32章)この縁に導かれて、彼女の兄モーディカイと偶然に邂逅する(33章)ことになる。そこにエリオットの自伝的な歩みを偲ばせるデロンダの内面描写がある。

He was ceasing to care for knowledge — he had no ambition for practice — unless they could both be gathered up into one current with his emotions; and he dreaded, as if it were a dwelling-place of lost souls, that dead anatomy of culture which turns the universe into a mere ceaseless answer to queries, . . . as if one should be ignorant of nothing concerning the scent of violets except the scent itself for which one had no nostril. (32 : 336)³

この一節には、敬虔な宗教感情と視野の広い知性のバランスをいかに取るかという問題意識が滲みでている。これはエリオットがアングリカン・チャーチに心中背を向けて、聖書批評に共感を見いだした二十代前半から一貫して変わらない問題意識である。信仰が知性を没する中から直感される境地であることに一面の真実を認めながら、反面で彼女は、健全な知性の自立性が信仰の深まりに果たす役割を熟知していた。教義と儀式・典礼に慣れ親しむことは尊いことであるが、そこに安住して、ものを見ること、考えることが疎かになることが問題なのである。現実認識の澄明さを失うと、固定的なドグマに囚われて、霊的真実に盲目になる。こうして信仰は惰性的な習慣となり、内実が空洞化を起こす。

デロンダが求める境地は知識と感情が一つに溶け合い、行動の原動力となることである。そのためには、肉体の営みでもある感情の流れに知性の光が当たり、これを積極的なものへと善導する働きが欠かせない。ここにエリオットがスピノザと共感する所以があった。⁴ 知識が観念的レベルにとどまっていると、行動のエネルギーとはならず、新しい現実

目覚める光ともならない。これが、「教養の死せるミイラ」、「迷える魂の住処」の暗喩 (metaphor) の真意である。すみれの香りを嗅いで感動を覚えた人は、すみれについて知る努力を要しないのである。この卓抜な暗喩も、信仰が真に人格に根を降ろすには、肉なる人間の霊肉相和す営みが命であることを喝破している。

フランクフルトのユダヤ人街を散策するデロンダの歴史的随想も、作家自身の記憶から湧き出してきた体験的真実⁵を偲ばせている。

. . . the forms of the Juden Gasse [Jewish Street], rousing the sense of union with what is remote, set him musing on two elements of our historic life which that sense raises into the same region of poetry : — the faint beginnings of faiths and institutions, and their obscure lingering decay; the dust and withered remnants with which they are apt to be covered, only enhancing for the awakened perception the impressiveness either of a sublimely penetrating life, as in the twin green leaves that will become the sheltering tree, or of a pathetic inheritance in which all the grandeur and the glory have become a sorrowing memory. (32 : 337 – 38)

古いユダヤ人街の侘しいたたずまいは、デロンダに遠いのにしえのユダヤ人の歴史を彷彿とさせたのである。中世から近世に至るユダヤ人ゲットーの暮らしは、度重なる襲撃と財産没収と追放の歴史であった。主流たるキリスト教徒の反ユダヤ主義 (大澤, 20 – 1, 32 – 6) は、迫害と苦難の宿命をこの民族に背負わせたのである。職業選択の自由を奪われた民族は、金融業以外に生きる方途が乏しかった。身を寄せ合って助け合いつつ、民族の絆を確認しよう場がシナゴグであった。移動の自由さえ制約され、ゲットーの狭苦しい空間にささやかな慰めと生きる糧を得た歴史は現代に生きている。これがデロンダの歴史的想像力を掻き立てたのである。

デロンダは、この街の光景を眺めながら、「日常的な出来事の中に詩が生きている」(32 : 337) ことを感じた。古ぼけた平凡なものごとにも、現在と過去をつなぐ記憶の絆が生きている。現在に遠い過去のこだまを聞き分ける力、これがデロンダの詩心である。この場に触発された彼の感慨は、そっと語り手の歴史感覚をも示唆している。ものの芽生えと成長と成熟が一方にあれば、他方に衰えと老いと死が

ある。それが自然の命の宿命である。これは、あらゆるものの起源を地球的時間の視野で問い掛ける進化論の発想である。環境と生命の相互依存の中で命が不斷に変異を繰り返す働きは、人の歴史の営みにも生きている。古木の朽ちた株から新たな芽吹きと成長がある。分解した有機物の栄養を摂取して、種が発芽し、双葉となる。時移って、夏の日光と慈雨を浴びた大木は心地よい緑陰を恵む。そして、営みを全うした命は静かに大地に還ってゆく。これと同様に、鋭敏な直観と想像力から新しい信仰が芽生え、預言者の言葉がシナゴグとなり、キリストの言葉が教会として形を得る。これらもまた、時の移ろいとともに形骸化し、因習のくびきとなり、新しい靈感の槍玉となる。こうして、古いものは新しいものに取って替えられる。

ここにエリオットが小説を通して成し遂げようとした意味探究のテーマが見られる。カロール(Carroll)によれば、人の歩みは無知の闇を小さな光をかざして一步一步手探りすることである。既知の領域と未知の領域は不安定に変動している。そこをいかくぐって試行錯誤の実験を続けることが生きることである。バランスが崩れると仮説がドグマになり、意味が断片化する。微妙なプロセスを近道しようとする、部分的な理解にとどまり、道に迷う。世界の暫定的な性質に堪えて、道標のない道を押し広げ、意味を発見してゆくことが生きることであり、語りが可能になる。この果てしない言語実験のプロセスが、エリオットにとって小説を書く意味であったという(35)。

上記の意味での意味探究のテーマをデロンダが担っているが、これを深化させる役割を果たしているのは、彼とモーディカイ⁶の関わりである。デロンダのアイデンティティの探究は、モーディカイとの出会いによって一歩高い境地に変化してゆく。このプロセス描写にはエリオット自身のユダヤ文化との対話が結晶している。

Ⅲ. モーディカイとデロンダー邂逅と信従ー

旧約聖書から新約聖書に継承されてきた見方に命の木の暗喩がある(Genesis 2 : 8-9, Revelation 2: 7, 22 : 1-2)。これは、父祖から伝承されてきた宗教的叡智が子孫へと伝わってゆく道理を意味する暗喩である。個人という葉は散っても、木の有機的生命は生き延びる。肉体を病み、いまわの際にあるモーディカイの精神は、散りゆく葉が従容として死を受け入れるように、新しい命の芽吹きに希望を託したのである。彼は、その希望をデロンダの宗教的感受性に見た。

Where else is there a nation of whom it may be as truly said that their religion and law and moral life mingled as the stream of blood in the heart and made one growth — where else a people who kept and enlarged their spiritual store at the very time when they were hunted with a hatred as fierce as the forest-fires that chase the wild beast from his covert. (42 : 493)

デロンダの内面描写に自然の生命活動の暗喩が顕著のように、モーディカイの語る言葉にもロマンティズムの生命主義の発想とイメージが生きている。人間の霊肉の営みと自然の命の働きを本質的に一つものと見る見方は、「生命の木」の暗喩に示されるように、旧約から新約へと受け継がれた伝統である。モーディカイの預言者的な生きざまと感受性はこの伝統を体現している。宗教は教義よりも体験と記憶にその生命的な基盤があるというのが、彼の暗黙の認識である。語り手の背後にいる作家は、この感受性と情緒の中に自分自身の宗教観を認めたのだ。「心臓(心)の中を脈動する血液の流れ」が生命の成長を促すイメージは、人の精神生活を自然の営みの中に見ている。宗教的叡智が人から人へとつながり、成長発展してゆく様は、歴史の展開を人の体験と記憶と情緒の伝承とみるエリオットの聖書批評の勘所を衝いている。そこに19世紀後半の「心の科学」(Davis 5)の知見が示唆されている。そこに、聖書の言葉と生理学・心理学の言葉が渾然一体となった境地がのぞいている。

悲しみと苦しみの記憶が人と人との絆を取り結ぶように、民族として味わった迫害と苦しみの体験は語り継がれ、記憶に沁みこみ、民族精神を練磨する。宗教を生きる糧として生かすのも、このような体験的叡智の継承性にある。

What is needed is the leaven — what is needed is the seed of fire. The heritage of Israel is beating in the pulses of millions; it lives in their veins as a power without understanding, like the morning exultation of herds; it is the inborn half of memory, moving as in dream among writings on the walls, which it sees dimly but cannot divide into speech. Let the torch of visible community be lit ! (42 : 497)

モーディカイがデロンダに心情を吐露する語りには、ヘブライ文化の血に溶けこんだ宗教感情が暗示されている。それは、ドグマの域を超えた集合的無意識を指し示している。ユダヤ民族遺産の伝承が、心臓の拍動と血液の流れの暗喩により生理的、肉体的次元で捉えられている。これは、信仰が知的認識のレベルをはるかに超えた宇宙・自然との原初的交感であることを偲ばせる。「記憶の生得的半分」が暗示するように、個人が体験を言葉で語り継ぐ次元ではなく、言葉以前の生理的・身体的記憶の次元がある。そこに、生きた歴史としての宗教の秘密がある。このような信仰の絆は、ユダヤ人の迫害と苦難の記憶にその母体があるのだ。

33章、34章で、質屋イズラ・コーエン一家の凡俗な暮らしが描かれている。安息日の儀式を古式に則って祝うささやかな宴には、家族の絆を喜ぶ静かな謝念が満ち満ちている。そこに居候をしているのがモーディカイである。困窮し、病苦のさ中にあるこの変人を、一家は何の見返りも期待せず淡々と受け入れている。語り手のまなざしは、ヘブライ詩人の風情を漂わせるこの奇人と、コーエン一家の心の触れ合いにユダヤ人同士の不可思議なつながりを見ている。受難の記憶が彼らを太い絆でつないでいるのだ。これこそ、信仰のあるなしを超えて、心の琴線でつながる縁である。この縁が人生に潤いをもたらす詩心である。ここにエリオットは、迫害と離散と流離の境遇を甘受しつつ、ヨーロッパ諸国を少数派として生き抜いたユダヤ人の知恵を見ている。

モーディカイの見者としての資質が、デロンダのユダヤ人としての本性を直感する場面がある。二人の出会いの不思議を描いた40章の題辞にワーズワース (Wordsworth) の詩が引用されている。

“Within the soul a faculty abides,
 . . . and serve to exalt
 Her ⁷ native brightness, as the ample moon,
 In the deep stillness of a summer even,
 Rising behind a thick and lofty grove,
 Burns, like an unconsuming fire of light,
 In the green trees; and, kindling on all sides
 Their leafy umbrage, turns the dusky veil
 Into a substance glorious as her own,
 Yea, with her ⁷ own incorporated, by power
 Capacious and serene.”
 (“Excursion” IV. 1058, 1061–70) (40 : 458)

ここには、エリオットがワーズワースから継承したロマン派的な想像力が表現されている。人の心は

宇宙・自然の働きの一部である。そこには、自然の神秘と照応するように、深い闇が広がっている。ちょうど月光が森の暗闇を煌々と照らすように、心のうっそうたる緑陰は、この澄明な光に照らされると、命の神秘を語り始めるのだ。魂の闇に隠された力は、静かに照らす光によって自然の神秘と合一する。理知ではなく無心によって、人は己を生かす私ならざる力をわがエネルギーとして生かすことができる。

旧約聖書の伝統には、己を空しくして創造主の御声に聞き従うという見方がある。五感を総動員して全身全霊で道理を直観するアプローチである。このような真実の捉え方には、人の心に無意識の闇が広がっていることを直覚したヘブライ詩人の叡智が生きている。ジョンソン (Johnson) によれば、フロイト (Freud) の夢解釈はユダヤ的伝統の継承であるという (414–15)。見者ヨセフ (Joseph) (Genesis. chap. 41–2) が人の見た夢により神の御心を洞察し、その予知能力により国を救った逸話が示すように、夢は人の心にある神の神秘領域たる無意識を映し出す鏡とみる見方はユダヤ文化の中に生きている。

エリオットがユダヤ文化に見た可能性の一つは、人の心に無意識の領域が存在し、これを洞察することによって人を癒し、創造主の摂理を読み解く伝統にあった。デロンダから見たモーディカイの真実把握の方法にも、この認識方法が示唆されている。語り手はデロンダの評価の眼で、モーディカイの宗教的感受性に、科学者が仮説を検証する実験科学の方法と相通じる想像力の働きを見ている。

. . . perhaps his [Mordicai's] might be one of the natures where a wise estimate of consequences is fused in the fires of that passionate belief which determines the consequences it believes in. The inspirations of the world have come in that way too: even strictly measuring science could hardly have got on without that forecasting ardour which feels the agitations of discovery beforehand, and has a faith in its preconception that surmounts many failures of experiment. And in relation to human motives and actions, passionate belief has a fuller efficacy. Here enthusiasm may have the validity of proof, and, happening in one soul, give the type of what will one day be general. (41 : 477)

ここには、宗教的真実の探求方法と科学的なそれ

との接点を模索するエリオットの問題意識が認められる。ヘブライ詩人・預言者のアプローチには、人の心であれ、自然界であれ、すべてを見通す眼が生きているという洞察がある。肉の制約に囚われた個人は見ることに限りがあり、偏見を免れない。そういう個人がものの全体性をほんやりとでも直観する道は、自己を空しくして創造主の声に耳を傾けることである。個々の現象の中に因果の連鎖を見通しつつ、全体がこれに呼応して変化している相をダイナミックに捉えることである。

闇を手探りする探究者には、ふと予感が萌してくる瞬間がある。それは血と汗の結晶として訪れる靈感である。暫定的な仮説が心に心象として像を結ぶと、観察と実験の辛抱強い作業が待っている。この忍耐に意味を添えるものは、人を内から輝かせる目的意識である。「熱烈な情熱が証拠の妥当性をもつ」という言い回しには、信仰と科学研究の接点には曖昧領域があることを暗示している。ここを探検する精神には、信じるという行為と解き明かすという行為が一味なのである。

宗教的信は証拠を求めない。創造主の愛を信じて行動を起こす人は愛の照り返しを受ける。信じることそのことが大きな功德を持っている。信じる決断が、結果の如何にかかわらず人格を変える契機となる。信仰と科学的探究の情熱は心象を心に思い描き、これを形に表現しようとするプロセス自体を喜ぶ意味で渾然一体である。情熱が予表（原型）（type）の形を取り、これが対型（antitype）となって結実するという発想は聖書に流れる予型論⁸（typology）を表現している。カロールによれば、モーディカイの予型論は、エリオット自身のものという。⁹ “Poetry begins when passion weds thought by finding expression in an image;” (“Notes on form in Art” (1868) 358) 心象を心に抱き、これに向かって情熱と思考が融合する時、人の心には詩が宿り、命の充足を感じる。彼女の予型論は、この文が示唆するように、緩やかな道理としてのものである。それは、歴史が生きて、繰り返すという認識に基づいている。“What has happened will happen again, and what has been done will be done again; there is nothing new under the sun. (Ecclesiastes 1 : 9) 「日の下に新しいことなし、」と喝破した伝道者の叡智は作家自身のものでもあったからである。

IV. 因習化した宗教とその再生

DD34章と35章は、ユダヤ文化とキリスト教文化の対照が際立っている。先述の34章の、イブラ・コーエン一家の安息日を祝う情景（367-68）に窺

えるように、家長が儀式を取り仕切り、これに応じて祖母、妻、子どもが式文を朗誦する様は、儀式のもつ厳粛さと祝祭情緒を湛えている。そろって式服をまとい、先祖の荒野での苦難を偲んで味わうご馳走はマンナ（神から恵まれた糧）（Exodus 16 : 14-36）を思わせる。宗教儀式は民族の古い記憶を呼び覚まし、家族の心を一つにする。そこに作家のユダヤ文化に対する共感と畏敬がにじみ出ている。

一方、35章はグエンドレンとグラントコート結婚披露を兼ねたクリスマスの宴を描いている。舞台はサー・ヒューゴーの荘園「アビー」（僧院）である。土地の貴族・名士が一堂に会している。この華麗な祝宴の集いを背景に、ハネムーンから3週間後のグエンドレンの心境が焦点化されている。彼女が自ら選びとった道は、夫と妻の自我と自我がぶつかる修羅場であった。社会的栄誉と物質的安逸の生活には慰みも喜びもなく、心には身をさいなむような不安と恐れがあった。サー・ヒューゴーの「甥」デロンダの眼には、彼女が心の蟻地獄に陥っていることが直観された。実家の経済的破綻の苦しみを逃れて、結婚に隷属からの救いを求めた彼女は、気がついてみると因習の鳥籠に入っていたのである。その閉鎖的階級意識と自己満足の風は、宗教さえも権威主義的な装飾に変えて、人を因習のくびきにつなぐ。その意味で、35章はグエンドレンの自由意志が敗北するからくりを浮き彫りにする画期的な章である。個人の自由を盲信するヒロインが、その大切に自由を失う皮肉を描く作家の眼差しには射貫くような洞察がある。個人の人間ドラマが歴史風土の濃密な描写の中に組み込まれているのである。

デロンダの育った館「アビー」は遠い昔僧院であった。その聖歌隊席は既に改装されて今に至っているのである。いにしえに純粋な信仰が花開き、高い志に生きた精神が遺産を遺した。その尊い遺産が時とともに風化し、制度と外形的権威のみが残される。

With the low wintery afternoon sun upon it [the Abbey], sending shadows from the cedar boughs, and lighting up the touches of snow remaining on every ledge, it had still a scarcely disturbed aspect of antique solemnity, which gave the scene in the interior rather a startling effect; though, ecclesiastical or reverential indignation apart, the eyes could hardly help dwelling with pleasure on its piquant picturesqueness. Each finely-arched chapel was turned into a stall, where in the dusty glazing of the windows

there still gleamed patches of crimson, orange, blue, and palest violet; for the rest, the choir had been gutted, the floor levelled, paved, and drained according to the most approved fashion, . . . (35 : 390)

ここに見られるのは、イギリスの古い歴史遺産の絵画である。そこにイギリスの辿った歴史が長い時の経過を織り込んで描かれている。中世僧院の敬虔な信仰生活は、やがて宗教改革の波に洗われ、16世紀には僧院はあらかた解体された。この遺構が生き残って国教会へと引き継がれるものの、17世紀にはピューリタン革命の勃発で、中世の遺産は破壊された。“ecclesiastical or reverential indignation”は、キリストの体としての教会を打ち壊す偶像破壊者の狂信に対する聖職者・会衆の義憤を暗示している。

時移って、人々の宗教をめぐる情熱と怒りは風化し、和らげられる。18世紀古典主義の時代には典雅な芸術趣味と庭園文化が花開く。時代精神が宗教的寛容と良識を求めたのである。「時代の最新の流行に従って聖歌隊席が取り払われ、…敷石が敷かれ、排水工事が行われた。」この描写が暗示しているように、貴族の社会的威光と経済的繁栄がパーク（荘園）の改良を促し、建築美と自然美が調和した田園風景が磨かれた。この時代の貴族は天国での救いより、この世を快適にする美意識を持っていた。

エリオットの言葉の絵画には鋭敏な歴史感覚が反映している。その感覚は歴史の河の流れをさながらに捉えている。すべては移ろい、ある時代の正義は次代のそれに取って替えられる。中世の職人芸の生み出したステンドグラスの繊細な色彩も色褪せ、往時のゴシック的荘厳は、かすかにその名残を残すのみである。長い時の経過のみが作りだす渋い美がある。作家の広い歴史的視野は、移ろいゆく時代精神を眺望し、グエンドレンの内面状況を相対的に位置づけている。エリオットの円熟してゆく言語感覚は中期までのリアリズムを乗り越え、*MM*と*DD*で言葉の絵画の奥深い表現力を自己のものとした。

V. 作家がヘブライ文化から学んだもの

シャトルワース (Shuttleworth) によると、エリオットは、自足的でありながら歴史的基盤をもつヘブライ言語と文化から想像力の言語を学びとったという。これは、伝統の型に囚われた19世紀イギリス思潮の文化と言語慣習の枠組を乗り越えようとする試みであった。ヘブライ文化は、因習に捕われたイギリス人の生きざまの閉塞状況を打破するのに貢献しうる有機的・歴史的成長の美德を備えていたとい

う。(184) エリオットは、1870年代の後期小説 (*MM*と*DD*) で伝統的リアリズムの限界を自覚し、その紋切型の慣用句と文彩を捨てる言語実験を模索していた。この実験を導く光となったのがダーウィン以後の進化論とヘブライ文化の有機的生命発展の発想であった。*DD* 40章は、作家がモーディカイに託した有機的生命観が躍如としている。

. . . may not a man silence his awe or his love and take to finding reasons, which others demand? But if his love lies deeper than any reasons to be found? Man finds his pathways: at first they were foot-tracks, as those of the beast in the wilderness; now they are swift and invisible: his thought dives through the ocean, . . . What reaches him, stays with him, rules him: he must accept it, not knowing its pathway. (40 : 469)

ここにユダヤ人が宿命づけられた矛盾と葛藤の現実が暗示されている。ヨーロッパ民族国家の主流文化が要求する価値を柔らかく受け入れつつ、心の奥底に自民族の伝統への愛が灯っている。異文化間の葛藤する価値のはざまで、自己を生かす真の言葉を手探りしている。これは、「荒野のけもの道」を突き止めるような営みである。明晰な慣習や規範の軌道に従っていれば答えの見つかる易しい道ではない。「太洋に飛び込む」暗喩が示唆するように、全身全霊を賭して私ならざる存在の囁きに聞き従う難行である。

この模索は、実験科学者が研究の最前線で既知の知識と読みを総動員して、直観の囁きを裏づけようとする行為と一脈通じている。ユダヤ文化に流れる預言者の系譜が語り伝えてきた知恵は、最も繊細な現実感覚を持った人が知識と直感を相働かせて、聞きとった導きの声を述べ伝える言葉に宿る。既に触れたように、モーディカイの言説は、実験科学者の真実探求方法と、旧約預言者の霊的直観による真実把握の間にあるアナロジー（異質な現象の中に同じ道理を読みとる眼）を洞察した表現である。これは、エリオット自身の見方が反映したものを見ることができる。

DD 完成の2年後に、エリオットは *Impressions of Theophrastus Such* (1878) を著しているが、このエッセー集の中に“The Modern Hep! Hep! Hep!”と題するものがある。これは、彼女がヘブライ文化から学んだ叡智を結晶させたユダヤ人論である。その一節にダーウィニズムの知見とヘブライ

的有機的生命観の融合を窺わせるものがある。

Every nation of forcible character — i.e., of strongly marked characteristics, is so far exceptional. The distinctive note of each bird-species is in this sense exceptional, but the necessary ground of such distinction is a deeper likeness. The superlative peculiarity in the Jews admitted, our affinity with them is only the more apparent when the elements of their peculiarity are discerned. (148)

ユダヤ民族の独特な歴史と伝統がキリスト教文化の歴史と深いところでつながっているのである。聖書批評の歴史的視野を自家薬籠中のものにしていたエリオットは、旧約聖書の母体から新約聖書が産声をあげた歴史的経緯を知り抜いていた。¹⁰ このつながりに生物進化の法則のアナロジーを用いたところに彼女の精神遍歴が凝縮している。多様な種の小鳥が環境の圧力により固有の進化を遂げ、独特のさえずりを獲得しても、共通の祖先から枝分かれした因縁は生きている。(Bowler 123) 異なった種の間の同質性は、“the necessary ground of such distinction is a deeper likeness” という文が暗示するように、必然法則の働きに由来する。“when the elements of their peculiarity are discerned.” という文脈に置かれた“the elements”は、生物の置かれた自然環境の要因と、ユダヤ民族の置かれた反ユダヤ主義という歴史的環境要因の含みをもっている。異民族の迫害と離散を宿命づけられたユダヤ民族は、独特の宗教文化の絆で苦難を乗り越えてきたという。

上記引用が示唆しているように、エリオットは旧約の語り伝えなくして新約の成立とキリスト教の勃興はありえなかったことを見通している。ビア(Beer)は、エリオットがDDで問い掛けた問題意識を解釈して言う。イギリス人は、精神文化の根をヘブライ文化に負っている。これを顧みないことは歴史の無知に由来する。無知と無関心が素地になって、島国根性と独善性に染まった自分の姿が見えないのだと。(186-87)

むすび

エリオットがDDで、かくも心血を注いでユダヤ文化を描こうとした動機の一つには、自国文化優越主義の風潮に浸る同時代のイギリス人に、いかにキリスト教文化がユダヤ教の伝統に多くを負っているかを示すこともあった。(Letters Vol. VI. 301)

この動機は、しかしながら、グエンドレン物語とユダヤ人物語の小説作法に質的不均衡を生じ、イギリス小説の伝統からの乖離をもたらす結果を招いた。一方が結婚という実人生の試練に苦悩するヒロインの悲劇的叙事詩を描いたのに対し、他方デロンダとモーディカイの関わりあいには理念の代弁者が演じるアイデア小説の要素が色濃い。

MMという作品の有機的生命体をさながらに作品世界に織り上げた作家が、伝統からの逸脱という犠牲を払ってまでヘブライ文化への共感を吐露した背景には、彼女の祈りがあった。つまり、イギリス文化の因習化と権威主義の風を組上にのぼせ、精神文化の再生を期す思いが働いていたのだ。¹¹ モーディカイの言説に見えるユダヤの霊性の言語には、作家自身の意味探求の試みが仮託されている。そこにシェークスピア的な没理想の境地と葛藤するヘブライの良心と倫理性が覗いている。これもまた、エリオットの偽らざる個性である。

註

- 1 Mary Ann は、*Ethics* 翻訳を1856年に完成させたが、原稿が彼女の存命中に日の目を見ることはなく、1981年に至って Thomas Deegan の編集により出版された。Lewes との非合法の「結婚」で世間の厳しい指弾を受けた彼女は、「倫理」を意味するタイトルが世間の反発を悪化させることを恐れて、翻訳の事実を伏せたという。Ashton. *George Eliot: A Life* (153) Ermarth は、翻訳の間の Spinoza との対話が四面楚歌の Mary Ann を支え続けたという。*George Eliot*. (32)
- 2 Baker によれば、幼少期から思春期にかけて福音主義的キリスト教の感化を受けた Mary Ann は、その頃から旧約聖書に見えるユダヤ人の歴史に関心を寄せていた。“Judaism.” *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. (184) 彼女は、Charles Hennell (Caroline, Sara の兄) の *Inquiry Concerning the Origin of Christianity* (1838) に感銘を受け (1841)、聖書批評に共感を深めた後も、いよいよヘブライ詩人・預言者への敬愛の念を深めたという。(Willey. 207-08)
- 3 本論で引用したテキストは *Daniel Deronda*. Oxford: Clarendon Press である。括弧内の数字は、章とこの版のページ数である。以下、同じ。
- 4 Spinoza は言う、知性が肉体の声に聞き耳を立て、感情の交通整理をすると精神は自由を得ると。*Ethics* (224)
- 5 1854年、Mary Anne は、妻子ある Lewes と駆

- け落ちし、彼の Goethe 研究の旅に同行した。
8ヶ月に及ぶ滞在中、二人はドイツ精神との対話を深めた。1873年に、フランクフルトのユダヤ人街を訪れた頃には、*Daniel Deronda* の構想が形を取りつつあった。*Oxford Reader's Companion to George Eliot*. (137–38)
- 6 Mordecai のモデルと見られる Deutsch は、*The Talmud* の解説を通して中世におけるユダヤ文化の復興とヘブライ語の復権運動を現代に蘇らせることに献身した。Baker. “Deutsch, Emanuel” *Oxford Reader's Companion to George Eliot* (91–2)
 - 7 いずれも “the soul” を指している。「魂」が「月」に譬えられている暗示もある。
 - 8 神学、聖書解釈において、特に旧約聖書の様々な記述、人物などの内に、キリスト教的な摂理に属する事柄の予型ないし予表を見出す解釈法。『岩波キリスト教辞典』(714)
 - 9 Carroll は、Mordecai がユダヤ精神復興の夢を Deronda に託すプロットに予型論を認めている。予型たる己の死は対型たる Deronda の宗教的誕生によって贖われ、ヴィジョンが肉となり、成就するというのが Mordecai の伝統継承の型であるという。(292)
 - 10 Eliot は、新約の成立とキリスト教の興隆を、旧約の伝統が民族宗教の枠組から脱皮した形とみている。“R. W. Mackay's *The Progress of Intellect*.” (1851) *Selected Critical Writings*. (31)
 - 11 Henry は、Mordecai が聖地を見ずに世を去り、聖地回復の志が見果てぬ夢に終わったプロットに触れて、作家が Mordecai と Deronda の生きざまに己の境地を託した訳ではないことを示唆している。むしろ、彼らの志は政治的思想というよりは、宗教的・詩的な情熱の発露とみている。(119)
- Works Cited**
Ashton, Rosemary. *George Eliot: A Life*. St. Ives: Penguin Books, 1997.
Beer, Gillian. *Darwin's Plots*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
Bowler, Peter J. *Charles Darwin: The Man and His Influence*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
Carroll, David. *George Eliot and the Conflict of Interpretations*. Cambridge: Cambridge UP, 1992.
Cogan, Donald. ed. *The Revised English Bible*. Oxford: Oxford UP, 1999.
Davis, Michael. *George Eliot and Nineteenth-Century Psychology: Exploring the Unmapped Country*. London: Ashgate, 2006.
Eliot, George. “R. W. Mackay's *The Progress of Intellect*.” *George Eliot Selected Critical Writings*. Ed. Rosemary Ashton. Oxford: Oxford UP, 1992. 18–36.
———. “German Wit : Heinrich Heine.” Ed. Rosemary Ashton. 193–233.
———. “Notes on Form in Art.” Ed. Rosemary Ashton, 355–59.
———. *Letters*. Vol. VI. Ed. by Gordon S. Haight. New Haven: Yale UP; London: Oxford UP, 1955.
———. *Middlemarch*. Ed. and introd. A. S. Byatt. New York: Oxford UP, 1999.
———. *Daniel Deronda*. Ed. and introd. Graham Handley. Oxford: Clarendon Press, 1984.
———. *Impressions of Theophrastus Such*. Ed. Nancy Henry. London: William Pickering, 1994.
Ermarth, Elizabeth Deeds. *George Eliot*. Boston: Twayne Publishers, 1985.
Henry, Nancy. *George Eliot and the British Empire*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
Johnson, Paul. *A History of the Jews*. New York: Harper Perennial, 1988.
Rignall, John. Ed. *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. Oxford: Oxford UP, 2000.
Shuttleworth, Sally. *George Eliot and Nineteenth-Century Science: The Make-Believe of a Beginning*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
Spinoza, Benedict de. *Ethics*. Ed. Thomas Deegan. Trans. George Eliot. Salzburg: Universitat Salzburg, 1981.
Willey, Basil. *Nineteenth Century Studies: Coleridge To Matthew Arnold*. Cambridge: Cambridge UP, 1980.
Wordsworth, William. *Poetical Works*. Ed. Thomas Hutchinson. 1969 ; revised edn. Oxford: Oxford UP, 1985.
大澤武男 『ユダヤ人とドイツ』 講談社現代新書, 2002年。
大貫隆他編 『岩波キリスト教辞典』 岩波書店, 2002年。